

# 2023 年度卒業論文

育児雑誌に描かれる父親の子育て  
—『ひよこクラブ』を題材として—

京都大学文学部人文学科

行動・環境文化学系 社会学専修

岸 めぐみ

0100-32-3194

# 目次

抄録.....	1
はじめに.....	1
<b>1 背景・先行研究.....</b>	<b>2</b>
1.1 育児雑誌の誕生と変遷.....	2
1.2 育児雑誌における父親像.....	3
1.3 本研究の問い.....	4
<b>2 日本の少子化と「父親の子育て」政策.....</b>	<b>6</b>
<b>3 『ひよこクラブ』における父親像の変化.....</b>	<b>8</b>
3.1 休日、もしくは母親に頼まれたときに育児をする父親(2010～2016年).....	10
3.2 楽しさと男らしさを強調する父親の育児(2010～2016年).....	10
3.3 本質的に育児が苦手で察することができない父親(2010～2016年).....	12
3.4 母親の働きかけで受動的に育児に参加する脇役としての父親(2010～2016年).....	12
3.5 母親と同じ質の育児をする父親(2017年～).....	15
<b>4 『ひよこクラブ』における育児の担い手の変化(2018年～).....</b>	<b>17</b>
4.1 育児の担い手が「ママ」から「ママ・パパ」、「親」、「大人」へ.....	17
4.2 2018年以降の育児世帯の生活.....	19
<b>5 考察・結論.....</b>	<b>23</b>
5.1 父親の育児の描写の変化の時期と要因.....	23
5.2 父親の育児と男らしさ.....	25
おわりに.....	27
参考文献.....	28

## 抄録

本論文の目的は、父親の育児参加が進まない日本の、育児におけるジェンダー規範を明らかにする一つの視点として、育児雑誌『ひよこクラブ』を題材に、2010 年以降の父親像の描かれ方の変化を明らかにすることである。分析の結果、2016 年までは、「休日、もしくは母親に頼まれたときに育児する父親」、「楽しさと男らしさを強調する父親の育児」、「本質的に育児が苦手で察することができない父親」、「母親の働きかけで受動的に育児に参加する脇役としての父親」が観察された。一方 2017 年から母親と父親が対等に育児をすることが目指されるようになり、「母親と同じ質の育児をする父親」が理想の父親像として提示されるようになった。それに伴い、2016 年までにみられたような男らしさの強調は姿を消した。また、2017 年までは、ほとんどの記事において育児の担い手の呼称が「ママ」であったが、2018 年に入ると「ママ」の代わりに、「ママ・パパ」や「親」、「大人」といった呼称が変わっていった。しかし、2018 年以降も稼ぎ手役割を果たす父親像がみられることから、父親は子どもが生まれたあとも稼ぎ手役割を果たし続けながら、母親と同じ質の育児をすることが求められるようになってきていることがわかる。雑誌は人々の理想を提示し、雑誌で共有される価値観が現実反映されていくことを踏まえると、育児雑誌において父親が稼ぎ手役割という男らしさを保持しつづける状況は、日本の育児におけるジェンダー平等の達成がまだ遠い状況であることを示している。

## はじめに

日本では、1990 年代以降止まらない少子化を前に、様々な少子化対策が打ち出されてきた。その中の主要な柱の一つが、育児休業取得の推進施策や厚生労働省のイクメンプロジェクトといった「父親の育児参加」の促進である。しかし、依然として父親の育児時間は母親の約 4 分の 1 にとどまっており(総務省 2021)、女性に育児の負担が偏るという構造が現在も続いている。

この主要な原因としてこれまで、男性の長時間労働が指摘されてきた。しかし、コロナ禍でテレワークが拡大した 2021 年度において、新型コロナウイルス感染拡大前の 2019 年度より子育て世帯の家事・育児時間の男女差が広がったという調査結果(東京都生活文化スポーツ局 2022)からは、男性は家で過ごす時間が増えたとしても、家事・育児をするわけではないことがうかがえる。つまり、日本では父親の育児参加が積極的に推奨されているにも関わらず、依然として育児や家事は母親が担うものであるという価値観が人々の間に根強く残っていることがわかる。

そこで本稿では、父親の育児参加が進まない日本の、育児におけるジェンダー規範について考える一つの視点として、育児雑誌における父親の育児の描かれ方に着目する。乳幼児を持つ親の情報源である育児雑誌において、育児をする父親がどのように描かれているのかを分析することで、現代日本の父親の育児について考察することを目指す。

## 1 背景・先行研究

メディアによる育児情報は、自分の子をもつまで育児経験がほとんどなく、核家族化によって親や地域によるサポートを受けることが少なくなっている今の親世代にとって大きな情報源となっている。また、落合恵美子(1990)によると、メディアはその時代の人々の平均的な振る舞いでなく、その時代における理想的なジェンダー観を表現するが、人々の価値観はメディアの影響を受けるため、メディアが描くジェンダー規範は、「現実」のジェンダー観になっていく。そのうち雑誌は、インターネットの普及以前から存在するメディアであり、インターネットの普及以後も、インターネットやテレビに次ぐ育児の情報源となっている(ベネッセ教育総合研究所2022)。したがって、日本の育児におけるジェンダー規範を考えるうえで、育児雑誌に着目することには大きな意義があると考えられる。

### 1.1 育児雑誌の誕生と変遷

育児雑誌に関する先行研究の検討に入る前に、育児雑誌の歴史を大まかに振り返る。まず、育児の情報を伝える媒体、すなわち育児メディアはいつ誕生したのだろうか。その起源は子どもをどう育てるかを指南する育児書が広まった江戸時代にさかのぼる。近世はおびただしい量の育児書が書かれた時代である。近世はそれ以前の戦国時代と異なって階層移動が少ない社会であって、家の存続が軍事力より後継者の人格に依存するようになっていったため、子どもの教育が重視されるようになった。また、出版技術の向上や中国からの知識の流入もあり、育児書が広く読まれるようになった。

近世の親子関係と子育てを研究する太田素子(2017)は、「江戸時代は父親が子どもを育てた時代」と指摘する。江戸時代においては、母親や子守女、祖母など女性が直接的な育児の世話をしていたが、子どものしつけや教育は家長、つまり父親の責任であった。家の継承を価値と考える社会においては、子育ては公けごとであり、家業を継ぐために父親が息子に教育することが要請された。したがって、子育て書の書き手も読み手も男性であり、子育ての指南は男性に向けて説かれる事柄に属していた(太田2017)。

明治時代に入り、産業化がすすむと男性は外で働き、女性が家事育児を担うという性別役割分業がみられるようになった。落合(2021)は、第二次世界大戦後、高度経済成長期には、産業構造が転換し、父は雇用者すなわちサラリーマン、母は専業主婦で家事・育児に専従する近代家族が一般化したと指摘する。また、この1960年代～1970年代にかけて、農村部から都市部への人口の大規模な流入がおこり、これにより1970年代以降、核家族化が進行した。高橋均(2004)によれば、こうした都市化、核家族化により、親族・地域との連携を絶たれ孤立した子育て期の母を支える情報源として、育児雑誌が出版されるようになったという。そして、天童睦子(2016)が指摘するように、『ベビーエイジ』(婦人生活社、1969年創刊)、『わたしの赤ちゃん』(主婦の友社、1973年創刊)といった、初の市販の育児雑誌は、子育てする母親の育児不安を解消し、実用的な育児情報を提供する役割を果たし、女性の妻・母役割への特化という社会状況の中で、都市部の若い母親を中心に広く受け入れられた。

1990年代には、『たまごクラブ』、『ひよこクラブ』(ベネッセコーポレーション、1993年創刊)といった、既存の専門家や学者等による育児情報ではなく、ママたちの子育て方法、失敗談、育児のコツといった母親が参加し、共感できるような内容が特徴的な「共感型・育児参加型」育児メディアが登場した(天童2016)。

2000年代に入ると、読者のニーズに合わせ、育児雑誌の多様化がすすんだ。とりわけ、『日経 Kids』(日経BP社、2005年創刊)、『プレジデント Family』(プレジデント社、2005年創刊)、『FQ JAPAN』(アクセスインターナショナル社、2006年創刊)といった父親を読者対象とした育児雑誌の創刊が相次いだ(高橋2011)。

2010年代後半からは、インターネットの普及により雑誌全般の発行部数が減少の一途をたどる中、『edu』(小学館、2006年創刊)が2016年、『bizmom』(ベネッセコーポレーション、2005年創刊)、『nina's』(祥伝社、2008年創刊)が2019年、『かぞくのじかん』(婦人之友社、2007年創刊)が2022年に相次いで廃刊となった。

## 1.2 育児雑誌における父親像

天童(2004)は、育児雑誌の創刊から、1990年代までの育児雑誌における父親像の変容を分析した。まず、育児雑誌は、1970年代の創刊当初から、父親の育児参加についての言及がみられた。父親による育児の「協力」は、家族の理想イメージとして当初から生成されていたのだ。その後次第に「子育てする父親」への注目度が増していき、1990年代になると、協力するだけの父親からより積極的に妻と二人で対等にケア役割を担う「新しい父親像」が志向される

ようになる。その一方で、この時期の雑誌上ではこのような「子育てする父親像」の理想と現実の落差を嘆く母親の愚痴や不満が共有されている。したがってこの時期の育児雑誌は、父親の積極的な子育てや、「夫婦二人で子育て」のメッセージが繰り返し発信される一方で、育児を担うのは母親であるという前提を覆すことはなかったと指摘した。

次に天童・高橋(2011)は、政府による「父親の子育て」政策の推進などにより、いっそう父親の育児に注目が集まった2000年代に、新たに相次いで創刊された父親向け育児雑誌の内容を分析した。それによると、これらの雑誌は、既存の育児雑誌と異なり、父親を明確な読者として位置づけ、「子育てと教育に積極的に参加する父親」像を記事内容に多分に織り込み、子育てに主体的に関わる父親像を構築している。そして、子育て、特に教育の分野において主体的に関わる父親は、子育てに積極的で性別役割分業を解消していく存在に見える一方で、父親のケア役割を母親と差異化することで、男女平等の進行に逆行する「家族の再ジェンダー化」を促進する面があると指摘した。

巽真理子(2018)は、このような父親の育児参加をめぐるジェンダー規範について考察した。まず、巽(2018)は、これまでの日本の育児研究は、研究対象である「子育て」の定義を行わないまま具体的な育児行為が考察されてきたことを指摘し、ケア論<sup>1</sup>から改めて「親の子育て」を捉え直した。そして、子どもの身体的・情緒的ニーズにこたえることを第一とし、親のジェンダーにこだわらない「ケアとしての子育て」を提唱した。そのうえで、父親の子育てへの関わりが重要視されはじめ「イクメン」ブームにつながる時期<sup>2</sup>の育児雑誌(『たまごクラブ』、『ひよこクラブ』)の父親像を分析した結果、現代日本において育児する父親は、「(戦後日本におけるヘゲモニックな男らしさである)稼ぎ手役割を優先する、母親とは違う親」という男性としてジェンダー化された存在であることを指摘し、「ケアとしての子育て」を実践しようとする際にジレンマが生じることを明らかにした。

---

<sup>1</sup> 巽(2018)はDalyによるケアの定義を参考にしている。Dalyはケアを「それが割り当てられ遂行される規範的・経済的・社会的枠組みのもとでの、依存的な存在であるおとなまたは子どもの身体的かつ情緒的な要求を満たすことに関わる行為や関係」(Daly2001:53 訳は巽(2018))と定義する。

<sup>2</sup> 本研究は、育児雑誌「たまごクラブ」「ひよこクラブ」の2009年1月号～10月号の父親向け連載記事を分析対象としている。巽(2018)は、2009年に父親の育休取得を促すための「パパ・ママ育休プラス」が整備され、2010年には厚生労働省がイクメンプロジェクトを開始し、「ユーキャン新語・流行語大賞」のトップテンに選ばれたことなどを踏まえ、この時期の雑誌分析はイクメンにつながる父親像を分析する上で適切だと述べている。

### 1.3 本研究の問い

先行研究では、育児雑誌は 1970 年代の創刊時から父親の育児参加が言及され、年々、父親の育児がより積極的に奨励されてきた。しかしそれは、巽(2018)が分析した「イクメン」という父親像に代表されるように、「男らしい子育て」として女性との差異を強調したものであった。そして、このような父親像は育児におけるジェンダー平等を達成するどころか、家族のケア領域における再ジェンダー化を促進するようなものであったことが示された。

育児雑誌における父親像に関する研究は、先述のようにいくつかなされてきたものの、天童(2004)が分析した 1990 年代以降は、父親を対象とした育児雑誌や、父親向けの特集のみの分析にとどまっており、育児雑誌全体を通して具体的にどのような記事で父親が登場し、どのように描かれているのかは明らかになっていない。またこれらの研究も、「イクメン」ブーム直前の 2009 年までの分析にとどまっている。しかし、2019 年に朝日新聞が実施したアンケート<sup>3</sup>では、「イクメン」という言葉を「嫌い」「どちらかと言えば嫌い」と答えた人が 7 割を超え、また約 7 割が、「イクメン」という言葉は、男性の育児だけが特別視されていると考えているなど、「子育てする父親」や「夫婦の子育て」に対する価値観、そして父親像は、父親の育児を推進する流れのなかで「イクメン」という言葉が生まれ、流行語になった時点から変化していると思われる。しかしながら、「イクメン」ブーム以降の 2010 年以降から現代にかけての通時的な父親像の変遷に着目した研究は、管見の限り行われていない。

以上を踏まえ、本稿では次のようなりサーチクエスチョンを設定する。

- ・ 父親の育児参加が求められるなか、育児雑誌における父親像はどのように変化しているか。
- ・ 育児する父親は男らしさとどのように関連して語られるか。
- ・ 現代において、先行研究の父親像が維持されている、もしくは新たな父親像が現れている場合、どのような社会背景が考えられるか。

本稿では、育児雑誌『ひよこクラブ』をとりあげる。『ひよこクラブ』は、ベネッセコーポレーションが発行している育児期向けの育児雑誌であり、妊娠・出産期向けの『たまごクラブ』とともに、

---

<sup>3</sup> 朝日新聞デジタル, 2019, 「フォーラム『イクメン』どう思う？」  
<https://www.asahi.com/opinion/forum/099/> (最終閲覧日 2023 年 10 月 23 日)

1993年に創刊された。この2誌はどちらも90年代半ばには発行部数で既存の出産・育児情報誌を上回り、1996年には、1歳半から3歳児の子どもを持つ親を対象とした『たまひよ・こっこクラブ』が創刊され、2000年代にはこれら三誌の合計発行部数は毎月78万部(2001年)をこえるまでになった。天童(2004)によれば、その特徴は、「読者の共感」に基づく「本音の育児」を前面に打ち出した点にある。その後、先述の通りインターネットの普及に伴い、雑誌全体の発行が減少の一途をたどり、多くの育児雑誌が休刊に追い込まれる中、『ひよこクラブ』は『たまごクラブ』とともに2023年に創刊30周年を迎え、現在発行されている育児雑誌のなかで最も長く続く育児雑誌となっている。

また、『ひよこクラブ』は2022年4月からは、生後0, 1, 2, 3か月の子どもを持つ母親を対象とする『初めてのひよこクラブ』、生後4, 5, 6, 7か月の子どもを持つ母親を対象とする『中期のひよこクラブ』、生後8, 9, 10, 11か月、1歳代の子どもを持つ母親を対象とする『後期のひよこクラブ』にリニューアルし、毎月発行から、年4回の発行に変更されている。

本稿では、2010年以降の『ひよこクラブ』の内容の経年比較分析を行う。2010年、2011年、2012年、2014年、2016年、2017年、2018年、2020年に発行された1~12月号、そして2022年1~3月号、および2022年の『初めてのひよこクラブ』、『中期のひよこクラブ』、『後期のひよこクラブ』の春、夏、秋、冬号、2023年のそれぞれ春、夏、秋号をデータとして使用する。そして、イクメンブーム以降から、現代にかけての父親の育児参加に関する記事を手掛かりに、「父親の子育て」、「父親像」の変遷を考察することを目指す。

## 2 日本の少子化と「父親の子育て」政策

分析に入る前に、日本の少子化と「父親の子育て」政策の変遷についてまとめておく。日本では、1990年の「一・五七ショック」以降、国家レベルの少子化対策への取り組みが相次いで行われてきた。しかし、出生数は増加と減少を繰り返しながら緩やかな減少傾向が続き、2022年の出生数は約77万人となった(厚生労働省2023)。



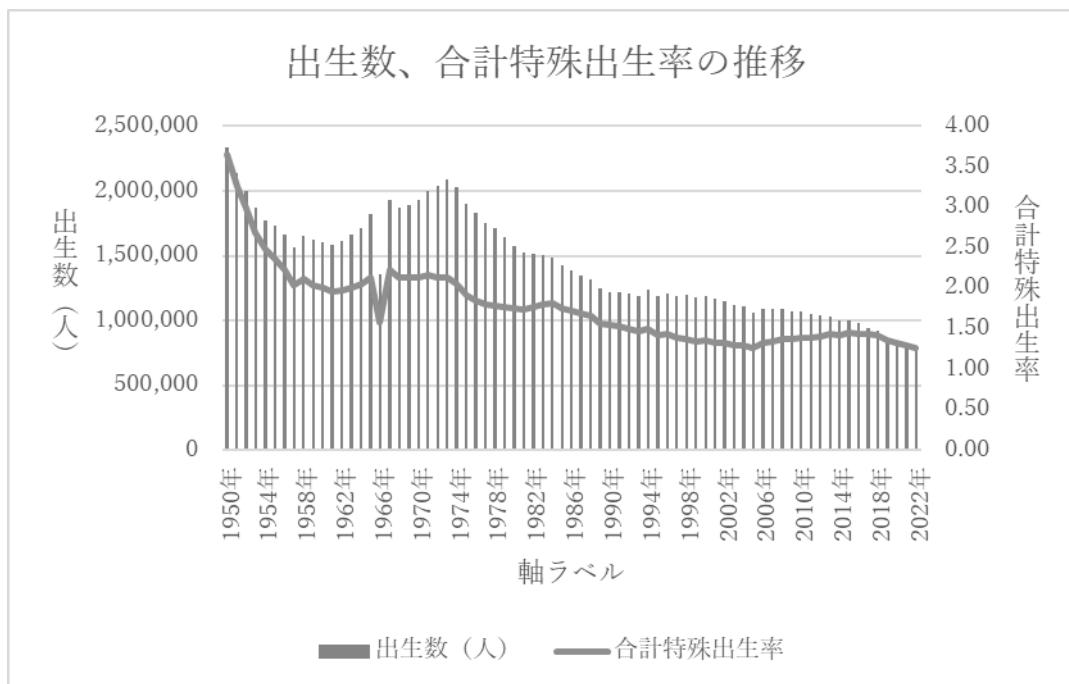


図1 出生数、合計特殊出生率の推移(1950年～2022年)

厚生労働省「人口動態統計」より筆者作成

石井クンツ昌子(2013)によると、日本における政府の子育て支援に関する施策は、1990年代にはエンゼルプランに代表されるように、保育関連事業など、母親の仕事の両立に重点を置いていたが、2000年代に入ると、男性を含めた働き方の見直しや両立支援に移行していった。宮坂靖子(2008)は、政府が父親の育児参加の啓発に力を入れ始めたのは、国立社会保障・人口問題研究所の「第十二回出生同行基本調査」(2002)により、夫の家事・育児参加が出生力にポジティブな影響を与えることが明らかになったからであると指摘する。

具体的には、2002年に策定された「少子化対策プラスワン」では、はじめて「男性の働き方の見直し」が重点目標とされた。また、2003年に施行された「少子化対策基本法」には、「父母その他の保護者が子育てについての第一義的責任を有する」(第二条)と記され、父親が育児責任を持つことが示されている。2004年の「少子化社会対策大綱」には、「男性の子育て参加促進のための父親プログラムを普及する」ことが目標として掲げられ、大綱の具体的実施計画である「子ども・子育て応援プラン」(2004)では目指すべき社会の姿として、「男性も家庭でしっかりと子どもに向き合う時間が持てる」ことが明記された。

2007年には、「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章」、「仕事と生活の調和推進のための行動指針」が策定され、少子化対策の一環としてだけでなく、社会全体の人々にとつ

での生活と仕事の調和が目指されるようになった。そのなかで、男女の育児時休業取得率、6歳未満の子どもを持つ男性の家事・育児関連時間の目標が定められた。

さらに 2010 年には、育児・介護休業法が改正・施行され、その中では父母がともに育児休業を取りやすくするパパ・ママ育休プラスが策定された。また、この年に厚生労働省による「イクメンプロジェクト」がはじまり、子育てを積極的に楽しむ父親を表す「イクメン」は 2010 年の新語・流行語大賞でトップ 10 に入った。

その後、2015 年の少子化社会対策大綱では、男性の意識・行動改革として、長時間労働の是正、人事評価制度の見直しなど管理者・経営者の意識改革が示された。

止まらない少子化を前に現在も引き続き、「産後パパ育休(出生時育児休業)」(2022 年 10 月～)や出産一時金の引き上げなど、男性の働き方の見直しや両立支援事業は継続して何度も展開されている。

これらの政策は、父親の育児参加につながっているのだろうか。総務省の社会生活基本調査(2021)によると、6 歳未満の子どもがいる夫婦の場合、2021 年における父親の育児時間は 1 日当たり 1 時間 5 分となり、前回調査の 16 年から 16 分増加した。ただし、母親の育児時間は 3 時間 54 分で夫は妻の約 4 分の 1 にとどまっている。したがって、様々な父親の育児促進政策が展開されている一方で、日本は依然として、父親の育児参加、育児におけるジェンダー平等の達成とは程遠い状況であるといえる。

### 3 『ひよこクラブ』における父親像の変化

本章では、2010 年以降、『ひよこクラブ』における「父親の育児参加」の描かれ方がどのように変化してきたのか、そしてそこで想定されている父親像がどのようなものかについてみていく。分析対象となっている号で、父親の育児参加に関連するおもな記事は、下記のとおりである。

表1 『ひよこクラブ』における主な父親の育児参加に関する記事

年	月	記事タイトル
2010	2月号	育児ってサイコー！ママに独り占めさせないぞ！今日から始めるぼくらの「イクメン」宣言
	5月号	パパとベビーのお留守番、どうする？どうなる？
	6月号	父の日記念 パパ向けアイテムを徹底リサーチ「男前」育児グッズ大

		集結！
	11月号	子育ての気になる!!あれこれ調べ隊「“イクメン”ってパパたちに浸透しているの？」
2011	1月号	育児を楽しみたいパパのためのマストバイブル MEN'S ひよこクラブ
	6月号	ひよこクラブ×パパ読者 800人のデータから導いた答えはコレだ！ “イクメン”誕生には最適タイミングがあった！
2012	6月号	父の日記念 ひよこ誌上すぐパパ自慢大会
	9～11月号	パパと赤ちゃんのおふろタイムをのぞいちゃおう！
2014	4月号	実録！パパと赤ちゃん2人っきりのお留守番リポ★
	6月号	父の日特別企画 子育て!!男塾
2016	1月号	ひよこクラブ編集長が鈴木おさむさんと対談！ 赤ちゃんのことだけでなく“ママと向き合うこと”こそ男の育児だと思う
	3月号	男脳 女脳 違いを知ればパパ&赤ちゃんと共に楽に向き合える！
	6月号	父の日記念企画 心得からお世話まで 父親育児 Special
2017	3月号	ユージさんの息抜き育児 Style
		ママとパパがもっと幸せになれる家事&育児シェアって？
	6月号	ママだけが頑張る「ワンオペお世話」はもうやめたい！もっとHAPPYに、ラクに、私らしく！ 父の日記念 SPECIAL 月刊ひよこパパ JOURNAL 号外！！
2018	6月号	ずっと仲よし夫婦でいるための魔法の育児シェア術
		集まれ！ひよこ組 父の日スペシャル!!パパ'sBEST SHOT 拡大版
	8月号	パパにも知っておいてほしい赤ちゃんのことママのこと 0～18カ月 母乳育児のキホン
	11月号	子育てトピックス パパの育休のこと
2020	2月号	パパが読むチーム育児 BOOK
	5月号	水嶋ヒロさんの子育て、仕事との両立、夫婦の分担のこと…
	6月号	集まれ！ひよこ組 父の日特別企画！パパとベビーのベスト SHOT 集

### 3.1 休日、もしくは母親に頼まれたときに育児をする父親(2010～2016年)

はじめに、父親の育児の頻度に注目すると、「子育ての気になる!!あれこれ調べ隊“イクメン”ってパパたちに浸透しているの?」(2010年11月号)において、「日ごろからママと赤ちゃんを気にかけて、休日は育児や家事をこなす”休日イクメン”が今どきのひよこパパのスタンダードになりつつあるようです」とあるように、休日のみ育児に参加する父親が標準とされており、毎日家事・育児をする母親との対比がみられる。また、2014年6月号の「父の日特別企画 子育て!!男塾」においては、仕事が忙しくなかなか育児に参加できない父親に対するメッセージとして、「さすがママ!」と心の底から感謝を伝えていけば、夫婦間に大きな波風は立たないはずだ」とあり、父親は育児に参加するよりもまず、稼ぎ手役割をはたすことが優先されていることがわかる。さらに、母親向けの記事には、「たまには赤ちゃんをパパに預けて気分転換をする」(「いいおっばいに効く生活 ダメな生活」(2012年10月号)、「時にはパパに寝かしつけをお願いします」(「生後0～90日まる見え Diary」2014年4月号)、「たまには、赤ちゃんのお世話をパパや家族にお願いし」(「ママ&赤ちゃんのための風邪・感染症対策で冬を元気に乗りきろう!」(2016年1月号)のように、父親の育児が「たまに」母親に「お願い」されて行われる補助的なものとして描かれている。また、「パパとベビーのお留守番、どうする?どうなる?」(2010年5月号)や、「実録!パパと赤ちゃん2人っきりのお留守番リポ★」(2014年4月号)では、父親が赤ちゃんとの留守番に奮闘するようすが描かれているが、これはこの時期において、父親と赤ちゃんが二人きりでいることがイレギュラーな事態であることが暗示されている。

以上より、2016年までの『ひよこクラブ』では、主に育児責任を担うのは母親であり、父親の育児は、休日もしくは母親に頼まれたら、時々手伝うくらいの頻度で行われている程度であるようすが描かれている。

### 3.2 楽しさと男らしさを強調する父親の育児(2010～2016年)

つぎに、父親の育児の内容をみていく。2010年、2011年において「育児ってサイコー!ママに独り占めさせないぞ!今日から始めるぼくらの「イクメン」宣言」(2010年2月号)、また「育児を楽しみたいパパのためのマストバイブル MEN'S ひよこクラブ」(2011年1月号)などの記事タイトルに象徴されるように、父親が子育てに参加する際は、「サイコー」「楽しみたい」というような表現が用いられている。また、その本文中でも「パパの育児は「する・しない」から「楽しむ」時代が変わりつつあります」、「育児を介して人生を謳歌するパパ、いわゆる“イクメン”の実態

に迫ってみました」のように、育児における楽しさ、充実感といったものが強調されていることがわかる。このような表現は、イクメンプロジェクトのホームページ(厚生労働省 2023)でのイクメンの定義である「子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性」と一致している。また、これは、「心配」、「悩む」、「不安」といった表現が散見される母親向けのお世話の記事<sup>4</sup>とは対照的である。

また、2010年から2016年にかけてみられるのは、「男の出番」、「男のテリトリー」、「大きいパパならではの安心感」、「ママより安定感のある父親の二の腕」といった男らしさの強調や母親の育児との差異を強調した、「パパならではの」の育児を実践する父親像である。

表2 男らしさや母親との差異を強調した表現がみられる記事・本文

年	月	記事タイトル・本文
2010	2月号	育児ってサイコー！ママに独り占めさせないぞ！今日から始めるぼくらの「イクメン」宣言 <ul style="list-style-type: none"> <li>ママとパパの育児は違うからこそ意味がある</li> <li>包み込むような母性の育児と、時としてそれを断ち切る父性の育児。</li> </ul>
	6月号	父の日記念 パパ向けアイテムを徹底リサーチ「男前」育児グッズ大集結！ <ul style="list-style-type: none"> <li>大型育児グッズセレクトは、男の出番。</li> <li>車関連のグッズは男のテリトリー。</li> </ul>
2012	12月号	脳と五感を刺激する冬のおうちあそび <ul style="list-style-type: none"> <li>パパならではのダイナミックな遊びができます。</li> </ul>
2014	6月号	父の日特別企画 子育て!!男塾 <ul style="list-style-type: none"> <li>男なら目指せ、最強の“育児男児”を!!</li> </ul>
2016	6月号	父の日記念企画 心得からお世話まで 父親育児 Special <ul style="list-style-type: none"> <li>「パパの抱っこは落ち着く」など、大きいパパならではの安定感</li> </ul>

<sup>4</sup> 例えば、「年末年始、赤ちゃんの具合が悪くなったら不安に思うママも多いでしょう」(2010年1月号「赤ちゃんの具合が悪くなったときガイド」)「成長や発達には個人差があるとわかっている、ほかの子と違うと心配になるもの」(2012年1月号「赤ちゃん50人の「うちの子これで大丈夫？」スッキリ解決 Q&A」)、「赤ちゃんの便秘に悩んでいるママは意外と多いよ」(2014年3月号「赤ちゃんの便秘こう防ぐ！こう治す！」)など。

		<p>を活かすのがコツ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ママより安定感のある父親の二の腕に抱かれ、赤ちゃんも安心できるのが男のおふろ。</li> </ul>
--	--	--

このような父親像は、巽(2018)において指摘された「母親同様にケア役割を担いながらも、母親とは決して対等にならない父親像」と一致している。このように、2016年までの父親の育児は、楽しさや充実感、男らしさを強調することによる母親の育児に対する優越性を感じられるような描写がみられる。

### 3.3 本質的に育児が苦手と察することができない父親(2010年～2016年)

一方、同じくこの時期には、対照的な父親像も登場する。それは、本質的に育児が苦手な父親像である。例えば、「添い寝・添い乳 安心・安全なやり方はコレ！」(2014年5月号)においては、母親が添い寝することは「母子の絆が深まり、赤ちゃんの情緒も安定」、「精神的に安定し、ママとの絆や信頼が深まります」と推奨される一方で、「パパはママのように赤ちゃんを意識しながら眠ることはできないので、赤ちゃんに密着して寝るのは×」とあり、母親にはできて、父親にはできないお世話があることが明確に示される。

また、「男脳 女脳 違いを知ればパパ&赤ちゃんと楽に向き合える！」(2016年3月号)においては、「基本的に男性は子育てが苦手と、初めは赤ちゃんへの興味も薄い」、「実はパパの脳は、子育てが苦手」といった、「父親は男性であるから育児が苦手だ」というような極めて本質主義的なメッセージがみられる。

そして、子育てが苦手な父親と同様に、本質主義的に語られるのは、「ママが思う以上にパパは気づかないもの」(「育児書どおりにいかないっをママ専門家3人&先輩ママ66人が解決します」2016年2月号)、「パパに「察して」は通じません」(「0～3カ月の「こうしたらもっとラクだったのに」というお世話はコレ！」2016年8月号)というように、「察することができない父親」である。

### 3.4 母親の働きかけで受動的に育児に参加する脇役としての父親(2010年～2016年)

このような本質的に育児が苦手と、察することもできないとされている父親がどのようにして、育児に積極的に参加するようになるのか。そこには、母親からの働きかけがある。例えば、「ひよこクラブ×パパ読者800人のデータから導いた答えはコレだ！“イクメン”誕生には最適タイ

ミングがあった！」(2011年6月号)と題した記事においては、「パパをスムーズにイクメンに変身させちゃう」ための「ママのサポート」として、「パパがかかわりやすい環境をつくってあげて」、「パパがしてみたいことをお願いしてみましよう」と書かれており、父親が育児に参加するようになるにあたって、母親のサポートが重要な役割をはたしていることがわかる。また、母親は父親に継続的に育児にかかわってもらうためには、サポートするだけでなく、「パパを教育」する必要がある。具体的には、父親が育児をした場合、「なんでもかんでもほめちぎって」、「プライドをくすぐって」、「文句を言わない」で、「パパにできるお世話を少しずつ増やしていき、達成感を与えてあげる」ことで、少しずつ協力的にしていくことが母親に求められる。この場合、父親は、母親に仕向けられ受動的に育児に向かう存在として描かれているといえる。

表3 母親に仕向けられ育児に参加する受動的で脇役な父親

年	月	記事タイトル・本文
2010	11月号	2人目産活いつから始める？ <ul style="list-style-type: none"> <li>2人目のことを考え、なるべく上の子のお世話に慣れるように、パパを教育</li> </ul>
2011	6月号	ひよこクラブ×パパ読者 800人のデータから導いた答えはコレだ！ “イクメン”誕生には最適タイミングがあった！ <ul style="list-style-type: none"> <li>パパをスムーズにイクメンに変身させちゃう</li> <li>パパがかかわりやすい環境をつくってあげて</li> <li>パパがしたいことをお願いしてみましよう</li> <li>ママが仲介役となり、赤ちゃんとパパがうまくかかわれるようにしましよう。</li> </ul>
2012	12月号	働くママの育児・仕事・家事「本気」と「ま、いっか」のバランスはコレ！ <ul style="list-style-type: none"> <li>パパを育てる♪ パパの育児・家事力をほめて、育てておきましょう。</li> <li>復帰時の家事分担や育児分担を交渉する上で、パパの能力を高めておくことは不可欠です。</li> </ul> 「自分ほめ」で始まる Happy 生活

		<ul style="list-style-type: none"> <li>少しでも家事や育児を手伝ってくれたら、思いきりパパをほめてみて。</li> </ul>
2014	4月号	<p>ナニワの助産師が育児の「困った!」「大変」に答えます</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(パパに育児に協力してもらうにはどうしたらよいかという質問に対する助産師の回答)A なんでもかんでもほめちぎって、子育てできる男に改革したって! ささいなことでも協力してくれたらほめましょう。「私よりおむつ替えが上手!」「さすがパパ」とプライドをくすぐっていけば、少しずつ変わってくるはず。</li> </ul>
2016	8月号	<p>0～3カ月の「こうしたらもっとラクだったのに」というお世話はコレ!</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>パパをどんどん育児に巻き込んで、パパ力をUPさせて!</li> <li>パパの父性も育てていきましょう</li> </ul>
	11月号	<p>妊娠中→産後のギャップ こんなはずじゃなかった Q&amp;A</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>やってくれたらすぐにほめて、ママは文句を言わないこと</li> <li>パパにできるお世話を少しずつ増やしていき、達成感を与えてあげると協力的に!</li> </ul>

以上より、2010年～2016年にかけての『ひよこクラブ』においては、本質的に育児ができず、察することも苦手な父親が、母親からの働きかけによって、母親とは異なる、男らしい子育てをするようになることがサクセス・ストーリーとして描かれる一方で、あくまで父親が育児をするのは休日や、時々母親から頼まれた時に限られており、父親は稼ぎ手役割を果たすことが求められていることがわかった。

実際に、この時期における男性の性別役割分担に関する調査(内閣府男女共同参画局2012)を見ると、「父親が仕事中心に生活することは、家庭の幸せにつながる」について、「とてもそう思う」、「ややそう思う」を合わせた回答が男性は25.8%、女性は36.8%にとどまる一方、「(結婚したら)夫は家族のために、仕事は継続しなければいけない」は、男性で77%、女性で80.2%、「(結婚したら)一家の大黒柱は自分である」は男性で75.4%、「(結婚したら)一家の大黒柱は夫である」は女性で80.9%となっている。つまり、父親が仕事中心で生活することに対する賛成は3割程度にとどまる一方で、一家を養うのは男性であるという意識は男女ともに高い。このような、父親は仕事だけに専念するのではなく、家事や育児をすることを男女ともに望む一方で、父親が一家の大黒柱であるべきだという意識は、「休日、もしくは母親に頼まれ



た時だけ育児する父親」が登場する 2016 年までの育児雑誌に強く反映されていることがわかる。

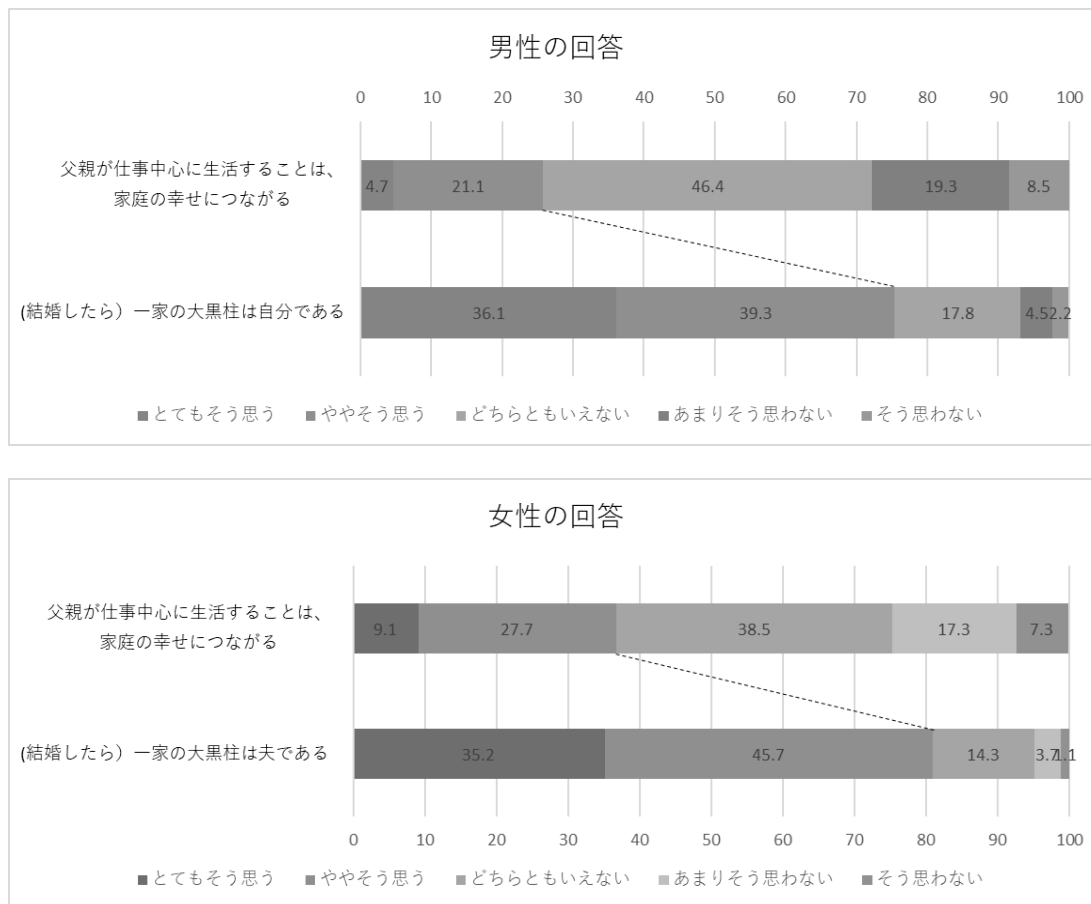


図 2 性別役割分担に関する意識(2012 年)

(「男性にとっての男女共同参画」に関する意識調査)(2012)をもとに筆者作成)

### 3.5 母親と同じ質の育児をする父親(2017 年～)

2017 年以降から、父親の育児に関する特集に変化がみられる。まず、「ユージさんの息抜き育児 Style」(2017 年 3 月号)と題した記事では、「笑顔で赤ちゃんに向き合うために、パートナーの協力は不可欠、でもママがパパに協力を「お願いする」のっておかしくない!!」、「ママがパパに手伝いをお願いする育児から夫婦で「一緒にする」育児へ」とあり、これまでのように父親が母親から頼まれた時に育児を手伝うのではなく、夫婦で一緒に育児をしていくことが家族の幸せにつながると語られる。そして「ママだけが頑張る「ワンオペお世話」はもうやめたい! もっと HAPPY に、ラクに、私らしく!」(2017 年 6 月号)では、「パパは育児のサポーターではなくプレイヤーになりませんか?」と述べられ、これまでのような脇役としてではなく、母親と対等に

育児することが求められるようになる。

2018年においても、「ずっと仲よし夫婦でいるための魔法の育児シェア術」(2018年6月号)と題した記事において、夫婦で育児をシェアしていくことが、良好な夫婦仲につながると語られ、その方法が具体的に紹介される。また、2018年以降「イクメン」という単語が誌面上でほぼ使われなくなり、使用される場合も、批判的な意味が込められるようになった。例えば、「ありがとう！たまひよ 25周年スペシャル特集」(2018年7月号)において、読者アンケートで2018年の理想のパパランキング 1位に選ばれたつるの剛士さんはインタビューにおいて、「僕、イクメンって言葉があんまり好きじゃないんです。だって、イクママっていわないでしょ？親が育児するの当たり前ですよ？」と発言している。これまでは、イクメンになることが父親の理想として語られてきたが、父親の育児を特別視するイクメンという単語に含まれるジェンダー非対称の違和感が誌面において共有された。これ以降、分析範囲において、イクメンが父親の育児のあるべき姿として使われることはなくなった。

夫婦一緒に子育て、父親は育児をして当たり前というメッセージはその後も続き、2020年2月号のどじ込み付録「パパが読むチーム育児 BOOK」では、「子育ての主役はママとパパの2人。パパはママに協力する人ではなく、一緒に子育てするパートナー」という前提に立ったうえで、父親に育児における男女のギャップを埋めることを呼びかける。具体的には、「ギャップを埋めたいお世話」として、「おむつを替える」、「離乳食を食べさせる」、「赤ちゃんと遊ぶ」、「寝かせる・泣きやませる」、「産後ママの心と体の理解」があげられる。そして、それぞれママが求める例とパパがやりがちな例が比較され、「男女ギャップを埋めるポイント」が紹介されている。ここにおいて、理想とされているのは、従来の男らしさを強調し、「パパならではの」育児をする父親ではなく、母親と同じレベルの育児をする父親である。

この背景として考えられるのは共働き世帯の増加である。実際、児童のいる世帯において母の仕事の状況の推移を見ると、2010年から2022年にかけて「仕事あり」の割合は60.2%から75.7%に増加し、そのうち「正規の職員・従業員」の割合も、16.9%から30.4%に増加している(国民生活基礎調査 2022)。このように出産後も仕事を続ける女性が増え、仕事に加えて家事や育児を一手に担う状況では、負担が女性に偏りがちであるため、夫婦での役割分担の必要性に迫られるようになり、育児雑誌上においても、夫婦における育児の分担、父親の育児レベルの向上は特集を組むべき重要なテーマとなっていったと考えられる。

## 4 『ひよこクラブ』における育児の担い手の変化(2018年～)

### 4.1 育児の担い手が「ママ」から「ママ・パパ」、「親」、「大人」へ

2017年に、母親と父親が対等に育児をすることを目指す記事がはじめて登場したことに伴い、その翌年の2018年から、お世話に関する記事における育児の担い手にも変化がみられる。2017年まで育児の担い手の呼称のほとんどが「ママ」のみであったが、2018年以降急激に、「ママ・パパ」や「大人」といった表記へと変化していった。2018年には、担い手がママのみとなっている記事も時々みられる<sup>5</sup>が、2020年以降の記事はママとパパの併記が徹底され、育児の担い手を母親に限定しない表現へと変わった。

例えば、授乳関連の記事は、2017年以前まで母親のみが担い手として想定されており、父親が登場することはほとんどなかった。しかし、2018年7月号「パパにも知っておいてほしい赤ちゃんのことママのこと 0～18カ月母乳育児のキホン」と題した記事では、「母乳は赤ちゃんの成長に大きくかかわるものだから、ママだけでなく、パパもぜひ一緒に読んでください」と、父親も授乳について知ることが促される。そして、「授乳前後のおむつ替えを担当しよう」、「げっぷをパパの得意技に」というように、母親が授乳をした際は、その前後のケアを引き受けることが父親へのアドバイスとして示される。

2020年11月号「母乳・混合・ミルクの授乳入門」では、父親が授乳において何をすべきかがより詳細に説明されている。本文中では、まず「“授乳”の意識、夫婦間でこんなにズレがある！」と、授乳における男女のギャップが指摘されており、ここから父親が授乳において母親と同じレベルが要請されるようになったことがわかる。そして、「“母乳＝ママしかできない”と思いがちですが、搾乳した冷凍母乳なら、ママ以外の方が赤ちゃんに飲ませてあげることが可能。授乳以外のお世話や家事を担う、ママのマッサージをするといった間接的なサポートでも、ママの授乳の負担を減らすことができます。パパも授乳の戦力になりましょう！」というように、母親の負担を減らすために、母親に代わって授乳をすることと、母親が授乳をする場合はそれをサポートすることが父親の望ましいあり方として示されるようになった。

その後、「産後0～3カ月でぶちあたる授乳の悩みはこれで解決！」(『初めてのひよこクラブ』2023年冬号)においては、母乳がでにくい母親の悩みに対し、父親ができることとして、「家事・育児を率先して引き受け、ママが休める時間をつくろう」、「13時～17時までには僕がお

---

<sup>5</sup> 例えば、2018年1月号「午前の大きな遊び&午後の小さな遊び」では、「ママの服や袖に洗濯ばさみをつけ、赤ちゃんに取らせて」、「ママの手にシュシュを何個かつけ、赤ちゃんに取らせて遊んで」など赤ちゃんの遊び相手としてママのみが想定されている。

世話と家事を引き受けるから、寝てきたら？」など、率先して引き受けると good!」、「出産により、ママの体は大きなダメージを受けた状態。食器洗いや洗濯など毎日の家事を担当できると負担軽減に。加えて、日中、育児で疲れたママの肩や腰などのマッサージをしてあげて」、「家事もマッサージも「言われたらやる」という姿勢だと、ママは不満に感じる事が。必要そうなことを自分で判断して動けると、喜ばれるはず」というように、家事・育児を率先して引き受け、母親の肩や腰をマッサージするなど、母親の指示がなくても主体的に家事・育児、身体のサポートをすることが大事だというメッセージが繰り返される。

授乳のように、父親のやるべきことが明確に示されるようになったわけではないが、ほかのお世話においても、2018 年以降、担い手の主語が「ママ」から「ママ・パパ」や「大人」になるといった変化がみられる。まず、赤ちゃんのおふろに関する記事では、これまで「ママ 1 人でおふろに入れるときどうするの？」(2010 年 5 月号)、「首すわり前赤ちゃん ママ 1 人でおふろに入れる実況中継！」(2016 年 6 月号)のように、母親が 1 人で入れることが想定されていたが、2018 年以降は「ママ 1 人・パパ 1 人でどう入れる？肌トラブルを防ぐには？首すわり前の赤ちゃんの沐浴・おふろ・シャワーテク」(2018 年 5 月号)、「大人 1 人でワンオペ Ver & 夫婦でツーオペ Ver 寒い季節のおふろ成功術！」(2020 年 12 月号)というように、赤ちゃんを 1 人でおふろに入れる担い手が、ママから、ママ・パパもしくは大人へと変化していることがわかる。

次に、赤ちゃんの病気の予防、対処法を扱う記事を見ると、2017 年以前は、「赤ちゃんは痛い、かゆいなどを口に出してママに伝えることができないため、異変に早く気づいて上げることが大切です」(「病気ガイド vol.129 耳のトラブル」2010 年 7 月号)、「ママがいちばんの主治医だということを忘れないで」(「病気ガイド vol.149 泣き方がいつもと違う」2012 年 4 月号)、「赤ちゃんの肌を守ってあげられるのはママだけですよ」(「赤ちゃんの夏の肌 予防&ケアまるわかり百科」2014 年 7 月号)というように、赤ちゃんの健康に直結するようなケアは母親のみが責任を負うことが想定されている。しかし、2018 年以降、「冬のウイルス・感染症から赤ちゃんを守るのはママ・パパの役目！発熱・嘔吐・下痢とたたかう冬の病気 受診の目安&おうちケア BOOK」(2018 年 1 月号)、「赤ちゃんの体調の変化に気づけるのはママ・パパなので」(「暑い季節のこれってどうなの？Q&A」2020 年 9 月号)のように、父親も赤ちゃんの命を守る責任がある主体として母親と併記されるようになってきていることがわかる。

そのほか、離乳食、あそび、泣き止ませなど、ほとんどの赤ちゃんのお世話に関する記事において、担い手の呼称がママから、ママ・パパもしくは親、大人へと変化している。

このように育児雑誌上においては、2017 年以前まで母親のみが想定されていたお世話に関し

でも、父親が登場するようになり、父親の育児は母親と対等に行われるものとして描かれるようになった。

それに伴い、「子育てトピックス パパの育休のこと」(2018年11月号)や、「2人目こそ、取得を考えたい！パパの育休について知っておこう」、「改正の目玉は、男性も育休を取りやすくなること。今しかできない“育児”があります」、「あきらめず、ママ&パパでよく話し合い、検討してください」(「夫婦で話し合っておくべきファミリー計画とお金の準備」『後期のひよこクラブ』2023年春号)のように、父親の育児休業を紹介、推奨する記事もたびたび掲載されるようになった。

その一方で、出産後も変わらず、稼ぎ手役割を果たし続ける父親像が雑誌上で共有されていることがわかる。例えば、「パパは毎日の通勤がある分、インフルエンザにかかる可能性が高いもの」(「冬の病気 受診の目安&おうちケア BOOK」2018年1月号)や、「ひよこ世代のママは日中、赤ちゃんと2人きりで過ごしているということも多いのでは？」(「0~2才のための防災手帳」2018年9月号)といった記述は、「一家の稼ぎ主」として仕事をする父親と、家の中で1人で育児をする母親という家族のあり方を前提としていることがわかる。このほか、「Q「パパ見知り」はどうしてあるの？ 接触する時間が短いことも一因でしょう」(「人見知り 後追いどうすればいいの？」2018年10月号)、「仕事で家を空ける時間が長いなら、せめて自分のことを自分でしましょう」(「パパが読むチーム育児 BOOK」2020年2月号)、「Q 平日触れ合う時間が少ないです。信頼関係を築くには？ 平日は忙しいと思いますが、休日は自分のことより赤ちゃんを優先して、なるべく触れ合うように心がけましょう」(「すくすく成長日記」2022年1・2月合併号)のように、2018年以降も、さりげなく稼ぎ手としての父親イメージが登場していることがわかる。

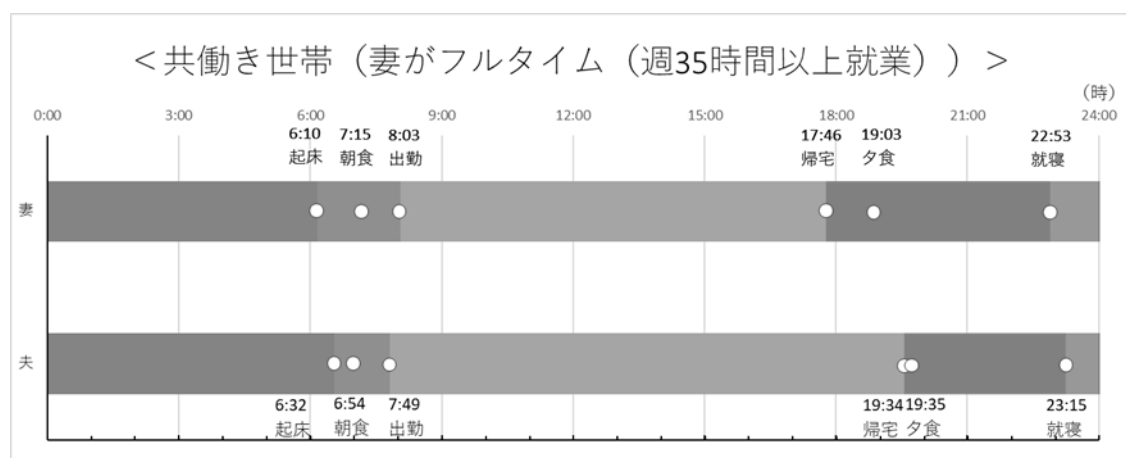
#### 4.2 2018年以降の育児世帯の生活

以上のように、2018年以降の『ひよこクラブ』にみられる、育児の担い手として母親を想定するのではなく、母親と父親の両方を想定するということは、どの程度まで、現実の育児世帯の生活を反映しているのだろうか。

まず、実際の『ひよこクラブ』の読者の間で、父母の育児分担がどのように行われているかわかる読者アンケートを見ていく。2023年にひよこクラブの読者を対象に実施された、0~3カ月ごろの寝かしつけは誰が担当しているのかというアンケートの回答をみると、もっとも回答が多かったのは「ママが100%担当、パパは担当しない」(「0~3カ月ごろの赤ちゃん寝かしつけ

ワザ 20 選』『後期のひよこクラブ 2023 年夏号』)であった。また、『ひよこクラブ』には毎号、「すくすく成長日記」というコーナーがある。月によって変動はあるが、約 30 人前後の 0～1 才の赤ちゃんの成長や生活の様子が毎月紹介される。掲載する家族は編集部が選んでいるものの、このコーナーは読者家族のありのままの生活をある程度反映したものであると考えられる。読者家族の 1 日の様子が 1 時間ごとにまとめられた表をみると、ほぼすべての家族が主に母親が家事を担っており、父親は朝早くから夜遅くまで仕事をしていることがわかる。たとえ共働きの家庭であっても、保育園に送るのは父親である場合もあるが、迎えはほとんどの場合が母親で、母親が子どもとともに先に帰宅し、夕食の準備などの家事を担っている。この傾向は、育児の担い手の呼称が「ママ」だけでなく「ママ・パパ」となった 2018 年以降も変化しない。ここから、雑誌上で母親と父親が対等に育児することが理想として語られる中でも、実際の読者は依然として母親が主に育児を行っていることがうかがえる。

では、『ひよこクラブ』の読者に限らず、一般社会ではどうだろうか。2021 年に行われた生活時間の調査をみると、末子の年齢が 6 歳未満の家庭では、妻の就業形態に関わらず、夫の帰宅時刻(平均)は、妻より遅く、夕食開始時刻(平均)と近接していることから、夕方以降の家事・育児等は妻が主に担っていることがわかる。また、共働き世帯の平日の生活時間は、家事関連時間は妻、仕事時間は夫に偏っている(男女共同参画白書 2023)。このように、育児雑誌上では、母親と同じ質の育児をする父親が理想として語られる一方で、現実では共働き世帯であっても父親は母親より帰宅が遅く、平日の家事・育児負担は母親に偏っていることがわかる。



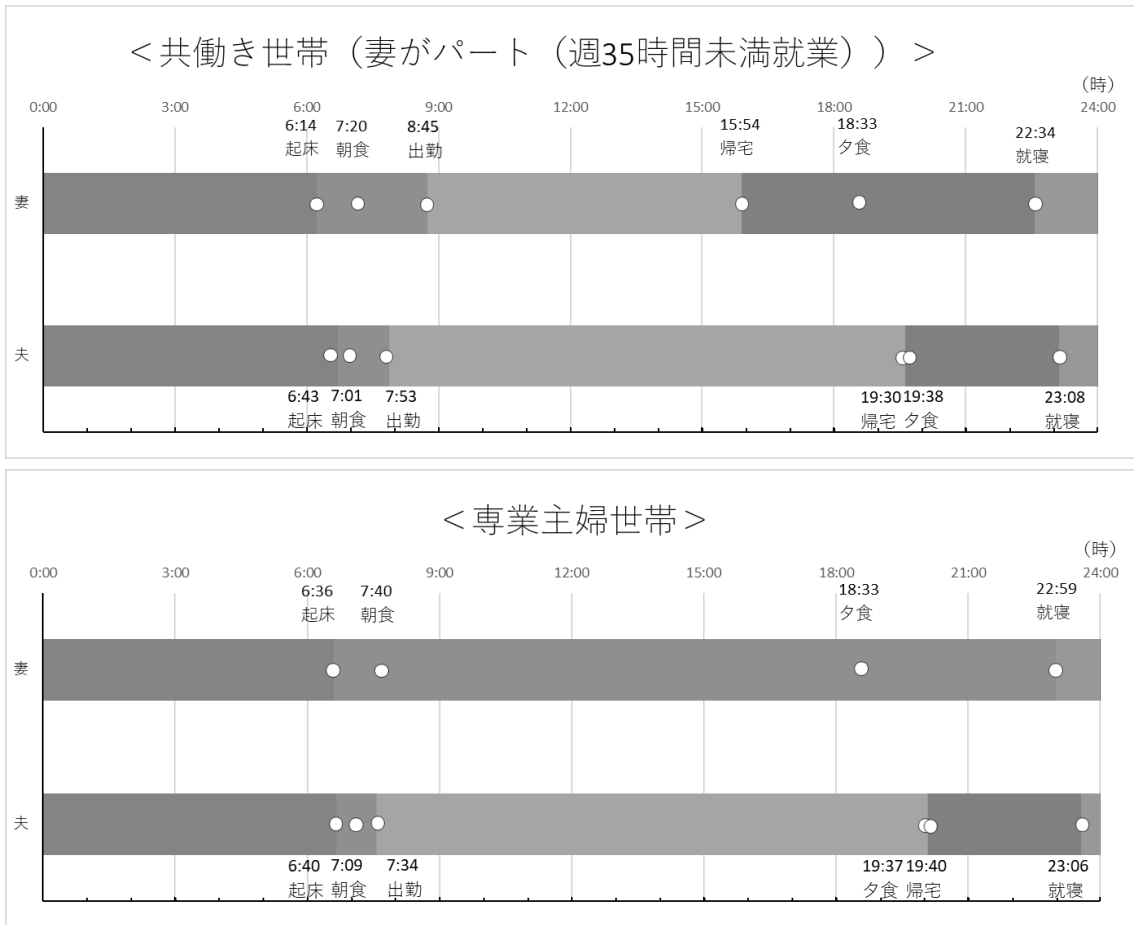


図3 末子の年齢が6歳未満の妻・夫の主な行動の平均時刻

（平日、子どものいる世帯）（2021年）

（「男女共同白書 2023」をもとに筆者作成）

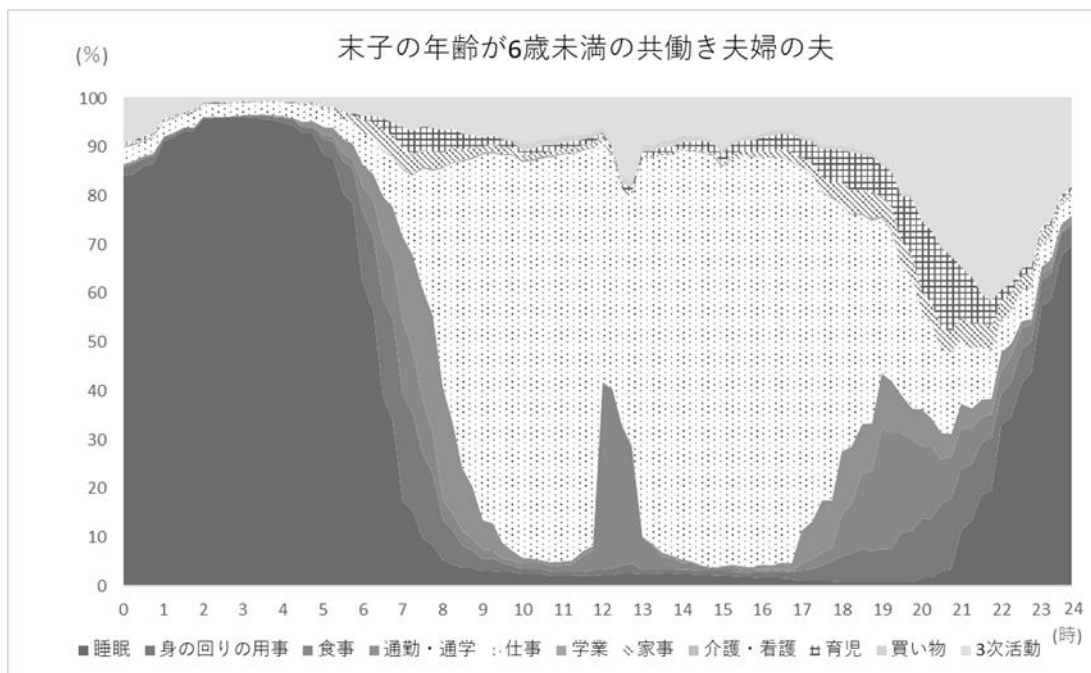
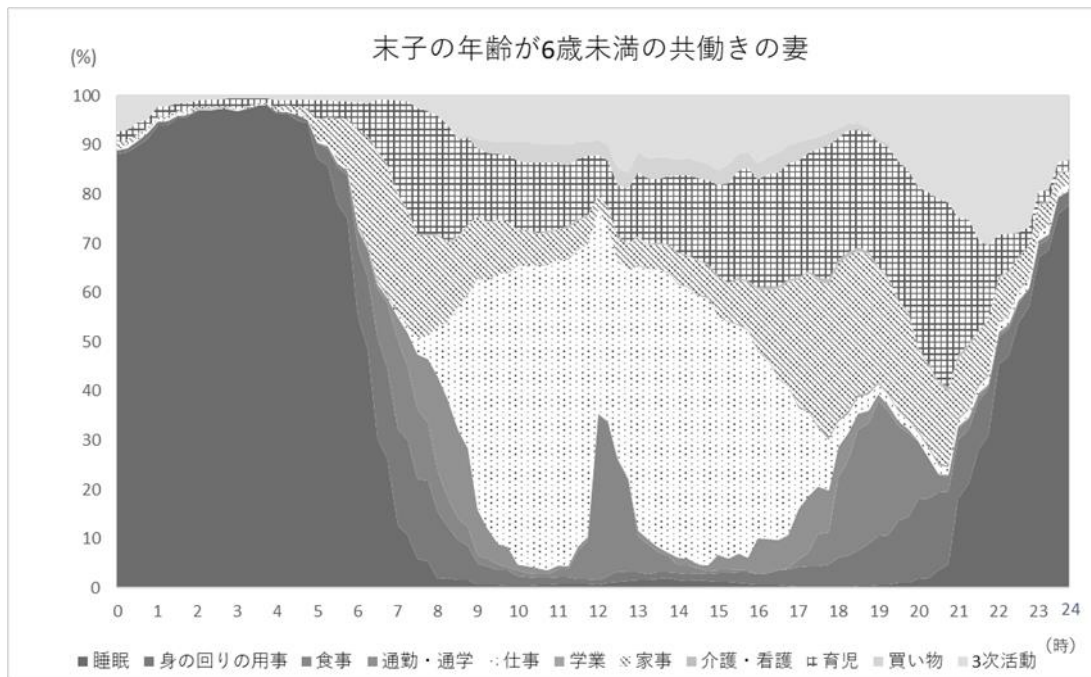


図4 時刻区分別行動者率(平日, 2021年)

(男女共同白書 2023)をもとに筆者作成

育児雑誌において、「育児におけるジェンダー平等を達成する父親像」と「稼ぎ手役割を維持し続ける父親像」が並存している状況は、日本における育児に関する意識変化と実践の間に依然として大きなギャップが存在していることを表している。そして父親は、子育てを母親と



同じように行うことが求められる一方で、「一家の稼ぎ主」として稼ぎ手役割を果たし続けることが依然として要求されていることがわかる。

## 5 考察・結論

2010 年以降から 2023 年における『ひよこクラブ』（2022 年からは『初めてのひよこクラブ』、『中期のひよこクラブ』、『後期のひよこクラブ』）を分析し、2010 年から 2016 年までと 2017 年以降で、父親の育児の描かれ方に大きな変化がみられることがわかった。まず、2016 年以前においては、父親の育児は休日、もしくは母親に頼まれた時に行われるものであり、その内容は、楽しさや男らしさを強調するものだった。また、父親関連以外の記事を見ると、お世話の担い手はほとんどが母親を想定しているものであり、父親が出てくるのは、遊びやお出かけといった、子どもの健康に直接かかわらない触れ合いにとどまっており、育児の内容も母親よりもかなり限定的であることがわかる。そして、男らしい育児をする父親とは対照的に、男だから育児ができない、察することができないというような本質的に育児が苦手な父親が登場し、そのような父親は母親によって指導されることで受動的に少しずつ育児に協力的になる存在として描かれている。つまり、2016 年までの『ひよこクラブ』においては、本質的に育児が苦手な父親が母親の働きかけによって、稼ぎ手役割を手放さないまま、母親とは異なる男らしい育児をすることが理想として描かれている。

2017 年から、母親と父親が対等に育児をシェアすることを目指す特集がはじめて組まれる。この時点においては、特集以外の記事については特に変化はみられなかった。2018 年から、お世話に関する記事において、育児をする人を表す呼称が「ママ」から「ママ・パパ」、「大人」、「親」などに変わり、母親のみが育児の担い手として想定される表現はほぼみられなくなった。そして、父親の育児は、母親と差異化するようなものではなく、むしろ母親と同じレベルの育児ができることが理想として語られるようになった。そこには、男らしさの強調はなく、そもそも父親を「男」で表象している表現もほとんどみられなくなる。つまり、2018 年以降の『ひよこクラブ』では、育児の担い手が中性化し、父親の育児と男らしさの結びつきがなくなったといえる。

### 5.1 父親の育児の描写の変化の時期と要因

まず、父親の育児の描写の変化について考察する。なぜ 2017 年においてはじめて母親と父親の育児をシェアすることを目指す特集が組まれるようになったのだろうか。

この変化が生まれたきっかけとして考えられるのは、『ひよこクラブ』が 2016 年 5 月号におい

て提案した「息抜き育児宣言」である。これは、読者の「疲れすぎて育児が楽しめない」「自分 1 人が大変すぎて孤独」という読者の声から生まれた、1 人で育児の責任を抱え込みがちな母親の負担を少しでも軽減することを目指す取り組みを表す言葉である。これに伴い、2016 年には、母親に「手抜きしてもいい、楽しんでもいい」と呼びかける特集<sup>6</sup>が組まれるようになったが、父親は依然として、「たまには」頼るべき存在として描かれていた。

しかし、母親の負担を根本的に減らすためには、父親が脇役としてでなく母親と対等に育児することが必要である。「息抜き育児」を提案して 1 年が経ち、編集部は、より本格的に母親の負担を減らす有効な手立てとして、母親と父親の「育児シェア」を打ち出したのではないかと考えられる。

次に、2018 年以降の育児の担い手の呼称の変化について示唆的なのは、2018 年の『ひよこクラブ』編集長の言辞である。

「(創刊時の 25 年前と比較して)今はベビーカーも、抱っこひももユニセックスなデザインが主流ですし、編集部にも「ママを主語にしないでほしい。僕も読んでいます」というパパの声を頂く時代になりました。」

(「たまひよ ONLINE」創刊 25 周年特集内のインタビュー<sup>7</sup>抜粋)

ここから、2018 年にはママを主語にすることへの違和感が父親読者から編集部へ寄せられていたことがわかる。『ひよこクラブ』においてみられた呼称の変化はこのような父親読者の声や、3.6 で見たような現実の子育て世帯の変化を踏まえたものだと考えられる。そして、2019 年 11 月号の 26 周年特集では、「チーム育児」がキーワードの 1 つとして掲げられている。

・ 子どもはかわいい♡でもギリギリ…。だからまわりを巻き込んで、自分らしく！「チーム育

---

<sup>6</sup> 「「息抜き育児」で笑顔のママになろう！みんなの超～手抜きな 1 日を大公開」(2016 年 7 月号) や「最強 息抜き育児テク」(2016 年 12 月号)など

<sup>7</sup> たまひよ ONLINE, 2018, 「妊娠・出産・育児情報誌の「たまひよ」創刊 25 周年！25 年前と比較！たまひよ「理想のパパランキング」発表 2018 年 1 位は、つるの剛士さん」, <https://st.benesse.ne.jp/press/content/?id=32561>

児」でいこう!!

- ・ (チーム育児とは)“ママ 1 人ではなく、まわりの人やモノに頼りながら子育てすること”  
(「「チーム育児」でいこう!!」『ひよこクラブ』2019 年 11 月号)

2018 年以降、様々なお世話の記事ですでに「ママ」から「ママ・パパ」への変化はみられていたが、この時にはじめて「チーム」という言葉を用いて母親だけでなく父親も対等に育児に参加することを目指すというメッセージを打ち出した。

ここから『ひよこクラブ』は、2018 年時点において父親読者の声や現実の子育て世帯の変化を踏まえて、お世話の担い手の呼称を「ママ」から「ママ・パパ」に変化させていき、2019 年 11 月において、これまでの母親主体を前提とした育児から、父親さらにはその他の人やモノとともに「チーム」で育児することを目指す方向への転換を雑誌全体のメッセージとして明確に掲げたことがわかる。これ以降、母乳の吸わせ方などの母親しかできないお世話に関する記事を除き、育児の担い手の呼称は、「ママ・パパ」や「親」、「大人」へと変化した。

## 5.2 父親の育児と男らしさ

つぎに、父親の育児と「男らしさ」の結びつきについて考察する。父親の育児と「男らしさ」を結びつける言説は、国際社会において、男性のケア参加を促すために用いられる「ケアリング・マスキュリティ」という概念と一致している。これまでケア労働は主に女性が担ってきたことから、ケアは女性性と結びつけられ、男性性は、強くあることや稼ぎ手であることと結びつけられていた。しかし、近年の国際的ジェンダー平等政策では、従来の支配的な特性ではなく、ケアに関与することの男らしさすなわち、「ケアする男性性＝ケアリング・マスキュリティ」(Caring Masculinities)がジェンダー平等に寄与する新しい男性のあり方として提唱されている(多賀ほか 2023)。つまり、男性の変化を促す上で、男らしさそのものを否定するのではなく、従来の男らしさに替えて「ケアする男らしさ」を新しい男のあり方として提案する手法で男性のケア労働参加の啓発が行われているのだ(多賀 2022)。2016 年までの『ひよこクラブ』においても、「母親がするもの」と考えられてきた育児を、新たに男らしさに結びつけることによって、男性の育児参加を促していると考えられる。しかし、多賀(2022)は主たる育児担当者である父親たちが、職業的成功や稼ぎ手役割といった旧来の男らしさを強く意識していたり、職場での女性差別意識や仕事での競争意識が強いほど、家事や育児といったケア労働の頻度が高いという研究結果から男性が「ケア」と呼ばれる労働を担うようになれば、それだけで男性が昔な

からの「男らしさ」の観念から完全に解放されるとは限らないことを示唆していると述べ、「ケアリング・マスキュリティ」という言葉が示す、「ケアする男こそ男らしい」というロジックによって男性たちを変化させようとする戦略の問題点を指摘する。つまり、「男らしさ」を強調した父親の育児言説は、父親を育児に抵抗感なく向かわせるという点では有効だが、従来の男らしさは保持され、母親とは異なる男らしさが強調されることで、育児の領域における性別役割分業を新たに生み出すという点で「育児におけるジェンダー平等」につながるとは言い難い。

2017 年以降の父親の育児は先述の通り、母親と同じレベルの育児ができることが理想とされ、そこには、男らしさの強調や、父親を「男」で表象している表現もほとんどみられなくなる。また、様々なお世話に関する記事においても、育児をする人を表す呼称が「ママ」から「ママ・パパ」、「大人」、「親」などに変わり、母親のみが育児の担い手として想定される表現はほぼみられなくなった。したがって、2017 年以降のひよこクラブにおいて提示される理想の父親像は、多賀(2022)によって指摘された男らしいケアの問題点を克服し、育児におけるジェンダー平等を達成しているように思われる。しかし、育児の担い手の呼称に父親が含まれるようになったことと育児におけるジェンダー平等を結びつけることは早計である。このような育児の担い手の呼称の中性化は、10 年以上前の母子健康手帳でもみられる変化であり、その問題点が指摘されている。母子健康手帳を分析した元橋利恵(2014)は、母子健康手帳における育児主体の呼称の中性化を「見せかけの中性化」と述べる。つまり、母子健康手帳は 1990 年代から 2000 年代を通じて、「母親」という呼称が中性化した「親」に代わり、一見育児を性中立的なものとして志向するようになっているが、実際には男性と女性の育児には幾重にも渡る差異が存在していることから、中性化は、母親に育児負担が偏っているという不平等を覆い隠す「脱ジェンダー化の政治」として働いてしまうと指摘したのだ。それでは、『ひよこクラブ』における呼称の中性化も見せかけの中性化であり、育児における男女の不平等を覆い隠すものだと言えるだろうか。確かに、『ひよこクラブ』で呼称の中性化がみられるようになった現在においても、育児負担が女性に偏っているのは事実である。しかし、母子健康手帳と異なり、『ひよこクラブ』においては、単に育児の担い手の呼称が中性化しただけでなく、「産後ゆらぎがちなママのメンタルを守ろう」(『初めてのひよこクラブ』2023 年冬号)、「産後の夫婦のズレはなぜ起こる？ママ & パパの頭の中を大解剖！」(『初めてのひよこクラブ』2023 年秋号)のように、現実における母親の育児負担や、夫婦間の育児に対する問題提起を常に行っているという点で、母子健康手帳でみられた「見せかけの中性化」とは異なっている。

しかし、直接的な男らしさを感じさせる表現はみられなくなった 2017 年以降においても、「稼

ぎ手役割を維持する父親像」が依然として雑誌上で共有されていることから、父親は稼ぎ手役割を維持しつつ、母親と同じ質の育児をする父親が理想となっていることが読み取れる。このように、父親が稼ぎ手役割という男らしさを保持し続けるという点で、現在の育児雑誌における理想の父親像は、育児におけるジェンダー平等を達成するという目的に直接つながるものとは言い難い。ただし、商業雑誌という媒体の特性上、このような理想像の提示はやむを得ないものだと考えられる。ほとんどの父親が稼ぎ手役割を背負っているという現状において、稼ぎ手役割から解放された父親像を理想としてしまうと、読者の現実の育児と乖離し、読者離れにつながる危険があるからだ。しかし、雑誌は人々の理想を提示し、雑誌で共有されるジェンダー観が現実反映されていくという点を踏まえると、現在の育児雑誌に稼ぎ手役割という男らしさを持たない父親像がまったく登場しないことは、日本の育児におけるジェンダー平等達成が、まだ遠い状況であることを示唆している。

## おわりに

本研究の限界として、まず『ひよこクラブ』という一つの育児雑誌のみを取り扱った点が挙げられる。『ひよこクラブ』では、基本的に朝から夜まで働くサラリーマンの父親と、専業主婦もしくは父親より短い勤務時間で働く母親と子どもで構成される核家族が前提となっている。また、育児の負担軽減のための方法として、自動調理鍋やロボット掃除機や高価な時短家電や、家事代行サービスが紹介されている<sup>8</sup>ことから、『ひよこクラブ』で想定される家族像は、金銭的余裕のある家族を対象としており、読者層も主にそのような家族像に当てはまる人々に偏っていると考えられるため、今回得られた知見をどこまで一般化できるか難しい。また、今回は育児雑誌という紙媒体に着目して分析したが、ここ最近では育児情報を SNS や WEB サイトなどのインターネットメディアで得る人々も多い。今回分析した『ひよこクラブ』も、姉妹誌である『たまごクラブ』と合わせて『たまひよ web』という web サービスを展開しており、雑誌よりも多岐にわたり詳細な情報を提供している。メディアにおける父親の育児の描かれ方をより広範に調査するには、このようなインターネット上の育児情報についても分析する必要があるだろう。

---

<sup>8</sup> 例えば「復職前には“仕組みづくり”がマストです！」(後期のひよこクラブ 2023 年春号)では効率化&タスクを手放す仕組みづくりとして「時短家電&代行サービスを導入する」と述べられ、「そろえておきたい時短家電 5 選」として、シャープのヘルシオホットクック(5 万 8000 円)、アイロボットのルンバ(7 万 9800 円)、パナソニック洗濯乾燥機(33 万円)パナソニックスリム食洗器(7 万 5240 円)、アクアスリムフリーザー(冷凍庫)4 万 7300 円が紹介されている。

## 参考文献

- 朝日新聞デジタル, 2019, 「フォーラム「イクメン」どう思う？」  
(2023年10月23日取得, <https://www.asahi.com/opinion/forum/099/>)
- ベネッセ総合研究所, 2022, 第6回幼児の生活アンケートレポート[2022年], (2023年9月25日取得,  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/WEB%E7%94%A8\\_%E7%AC%AC6%E5%9B%9E%E5%B9%BC%E5%85%90%E3%81%AE%E7%94%9F%E6%B4%BB%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%83%88\\_%E3%82%BF%E3%82%99%E3%82%A4%E3%82%B7%E3%82%99%E3%82%A7%E3%82%B9%E3%83%88%E7%89%88.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/WEB%E7%94%A8_%E7%AC%AC6%E5%9B%9E%E5%B9%BC%E5%85%90%E3%81%AE%E7%94%9F%E6%B4%BB%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%83%88_%E3%82%BF%E3%82%99%E3%82%A4%E3%82%B7%E3%82%99%E3%82%A7%E3%82%B9%E3%83%88%E7%89%88.pdf))
- 石川由香里, 2019, 「雑誌から読み解く育児する母親像 よき「母親」とセクシュアリティの両立可能性」『活水論文集 健康生活学部編』56: 25-38.
- 石井クツ昌子, 2013, 『「育メン」現象の社会学—育児・子育て参加への希望を叶えるために—』ミネルヴァ書房, 76-80.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2002, 「第十二回出生動向基本調査」
- 厚生労働省, 2022, 「国民生活基礎調査」,(2023年11月24日取得,  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/dl/02.pdf>)
- 厚生労働省, 2023, 「令和4年(2022年)人口動態統計(確定数)の概況」,(2023年9月24日取得,  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai22/dl/gaikyouR4.pdf>)
- 宮坂靖子, 2000, 「育児の歴史—父親・母親をめぐる育児戦略」昭和堂, 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子編『男の育児・女の育児—家族社会学の観点からのアプローチ』25-44.
- 元橋利恵, 2014, 「「男女参画時代」時代の母親規範: 母子健康手帳と副読本を手がかりに」『フォーラム現代科学』13: 32-44.
- 村松康子, 2000, 「子育て情報と母親」目黒依子・矢澤澄子編『少子化時代のジェンダーと母親意識』新曜社
- 内閣男女共同参画局, 2012, 「「男性にとっての男女共同参画」に関する意識調査報告」,

- (2023年11月24日取得,  
[https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/dansei\\_ishiki/pdf/chapter\\_3\\_1\\_1.pdf](https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/dansei_ishiki/pdf/chapter_3_1_1.pdf))
- 内閣男女共同参画局, 2023, 「令和5年度版男女共同参画白書(概要)」,  
(2023年11月24日取得,  
[https://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/r05/gaiyou/pdf/r05\\_gaiyou.pdf](https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r05/gaiyou/pdf/r05_gaiyou.pdf))
- 落合恵美子, 1990, 「ビジュアルイメージとしての女—戦後女性雑誌が見せる性役割」 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編『日本のフェミニズム7 表現とメディア』岩波書店.
- 落合恵美子, 2021, 『21世紀家族へ 家族の戦後体制の見かた・超えかた』有斐閣.
- 太田素子, 2017, 『江戸の親子 父親が子どもを育てた時代』吉川弘文館.
- 総務省, 2021, 令和3年社会生活基本調査 生活時間及び生活行動に関する結果,  
(2023年9月24日取得, <https://www.stat.go.jp/data/shakai/2021/pdf/gaiyoua.pdf>)
- 巽真理子, 2018, 『イクメンじゃない「父親の子育て」—現代日本における父親の男らしさと「ケアとしての子育て」』晃洋書房
- 多賀太, 2006, 「男らしさの社会学 揺らぐ男性のライフコース」世界思想社.
- 多賀太, 2022, 「ジェンダーで読み解く男性の働き方・暮らし方 ワーク・ライフ・バランスと持続可能な社会の発展のために」時事通信社
- 多賀太・石井クンツ昌子・伊藤公雄・植田晃博, 2023, 「ケアする男は「男らしい」のか—ケアリング・マスキュリニティの複数性に関する計量分析—」『家族社会学研究』35(1): 7-19.
- 天童睦子, 2004, 「育児戦略の社会学—育児雑誌の変容と再生産」世界思想社.
- 天童睦子・高橋均, 2011, 「子育てする父親の主体化—父親向け育児・教育雑誌に見る育児戦略と言説—」『家族社会学研究』23(1): 65-76.
- 天童睦子, 2016, 『育児言説の社会学—家族・ジェンダー・再生産』世界思想社.
- 東京都生活文化スポーツ局, 2021, 令和3年度男性の家事・育児参画状況実態調査,  
(2023年9月25日取得,  
[https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/danjo/wlb\\_top/files/0000001633/sokuhou.pdf](https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/danjo/wlb_top/files/0000001633/sokuhou.pdf))